

# 故山崎亨先生を偲ぶ

遠藤 彰

(大学神学部教授)

元大学神学部名誉教授山崎亨先生は、去る五月七日、八十年の生涯を終えて天に召された。

今出川校地には、明治の風格を漂わせる建物(重要文化財)が五棟ある。中でも、多くの同志社人の心の中に同志社の象徴的建物として息づいているのは、クラーク記念館(旧神学館)であろう。しかし、この前世紀の煉瓦建築の、地震や台風時における危険度が一九五〇年になって度々指摘され、事実、中にいた私たちはしばしば肝を冷す経験を持った。その頃、神学部長は山崎先生であった。先生は、大学を通して京大工学部に調査を依頼し、震度三で倒壊の公算大という報告を得、早速内部補強と共に外側に巨大な支壁を造らせて強化を計られた。お蔭でこの建物は、倒壊を免れ今にいたるもその美しい姿を天空に聳立させている。

現神学館の建設も、また山崎神学部長時代のプロジェクトであった。当時、世界教会協議会(WCC)に神学教育基金(TEF)という部門があり世界の有力神学教育機関を選んで重点的に援助を行う計画を持っていた。山崎部長は逸早くこの基金に申請を行い、各

方面の支持を取りつけ、幸いに援助の指定を獲得された。これを基に大学はさらに資金を支出し、現在の神学館は完成することができた。私たちは、クラーク記念館と現神学館の双方を見上げる度に、山崎先生の御苦心を思い感謝の念を新たにするのである。

これは、山崎先生の同志社とくに神学部に對する御貢献をシンボリックに述べたのであって、先生の御功績が単に建物に関することに留まるものでないことは言を俟たない。先生の本領は、もちろん旧約学の研究と神学教育とにあった。その著作論文は、一九四〇年代より四〇年にわたり、旧約概論、予言者研究、聖書の注解的研究など広範囲に亘った。そのうち『予言者の研究』(一九四五年)は東大に、『エゼキエル書注解』(一九五二年)は同志社大学に学位請求論文として提出され、それぞれ文学博士、神学博士の学位を受領された。先生の学風の特徴は、イスラエル宗教史と関連宗教史および政治社会史史の綿密な考証と旧約文書の周到な語学的文献学的意義とにあり、その優れた業績の故に、バークレーの太平洋神学校に客員教授として招かれ、またその時、同校から名誉学位を贈られ



た。

先生は優れた研究者であると共に、激しい  
 気迫と細やかな愛に満ちた教育者であった。

私自身学生時代・聖書語学、史的批判、文献  
 批判、古代宗教学史、予言者研究など、旧約学  
 の基本を先生から学ぶ幸を持ったのである  
 が、最も感銘を受けたのは予言者の講義であ  
 った。語学的分析や史的考証によって予言者  
 たちの生涯や思想が輪郭を現わすと、俄かに  
 先生自身がイザヤやエゼキエルに見えて来  
 て、二千数百年を越えて彼らの声が響き出  
 す。その声は、神の言を取次ぎ、不義を憤  
 り、義人の悲運に涙し、法憚怠慢のわれわれ  
 学生を叱咤し、かつ温い慰めと励ましを与え  
 るのであった。私たちは、講義の度に山崎先  
 生を衝き動かす神の力を実感して畏怖しつづ  
 も心底魅せられて行った。予言者の姿勢と  
 は、自己を神の座に据え威猛高に他を非難糾  
 弾する態度とは全く異なる。先生は、学問や信  
 仰や経済状態に悩みを持ち脱落の瀬戸際にあ  
 る学生を、部長室や自宅によび、一緒に膝ま  
 ずいて祈る愛の人であった。どれほど多くの  
 学生が、先生の人知れぬ支えによって再起さ  
 せられたことであろうか。

先生は、一九三〇年大学文学部神学科助手  
 となり、一九七七年定年で退職されるまでの  
 四七年の間、同志社教育に捧げ尽された。学  
 生時代を合せると同志社生活は優に半世紀を  
 越える。一九五五年より六年間神学部長の重  
 責を負い、ついで三年間宗教学部長として大学  
 のキリスト教主義教育の責任者であられた。  
 神学部や宗教部の責任者であるか否とを問わ  
 ず、先生はいかなる場合でも求められれば直  
 ちにチャペルで学生たちに語ることを持つ  
 ておられた。その炎のごとき熱弁は数多くの  
 若者の胸を動かし、それによって神学部の門  
 を叩く者もまた少くなかった。本学の教授  
 で、学生時代以来山崎先生より洗礼を受ける  
 ことを念願とし、ついに数年前受洗の喜びを  
 得られた方もいられるのであ。天上の先生の  
 霊に永久の平安を祈りつつ。



# 小野則秋先生のことども

青木次彦

(大学文学部教授)

小野先生に初めてお目にかかったのは、もう四〇年近くも前である。当時、図書館主任ということで、湯浅八郎総長兼図書館長の下で図書館業務の一切を委任されておられ、私の採用についても履歴書での審査と面談程度で決まってしまった。一九四八(昭和二三)年のことである。それから一九六三(昭和三八)年一〇月に社史料編集所に転出されるまでの約一五年、私は同じ職場で部下として勤務することとなった。

一九四八(昭和二三)年といえば、その前年に『日本国憲法』が公布され、『教育基本法』『学校教育法』の制定を見、教育制度が「新制」に切替えられる時期であった。しかし、物資欠乏とインフレーションの激しさは、郵便料金の一挙四倍値上げなどのこともあり、同志社でも給料が二倍に改訂されたことから、その強烈さが想像されよう。そのような状況下で、教育の復興と改革が同時に進められなければならなかった。そして、図書館ではその衝に当る実質的責任者は小野図書館主任であった。

それより以前、小野先生は一九三三(昭和八)年に福岡県の八幡市立図書館(当時)に

勤務、同志社へは一九三五(昭和一〇)年にこれ司書として図書館の近代化を推進された。その一つは『日本十進分類法』を参考として沢田勇次郎司書とともに『同志社大学図書分類表』を編纂し、これによる蔵書の分類整理で、それは一九三五(昭和一〇)年頃のことである。ついで『日本目録規則』と『日本件名録目表』に準拠した著者目録・件名目録及び分類目録の編成をも順次に進められた。これら図書整理に関しては戦前の日本で最高のレベルにあったということができよう。そして、いま一つは学園全体の図書整理の標準化・統一化をも進める計画で部分的には戦前既に実行にうつされたが、戦争のため中断せざるをえなかったようである。

そのような戦前の基盤の上に、戦後いち早く、そしてより充実した大学図書館の実現を指向され意欲的に業務に取り組んでおられた。しかし図書館において技術的な図書整理の問題は重要であるが、そのみ重視されたわけではない。図書館の理念について、図書館の歴史について、さらに書誌学などにも多大の関心を寄せ、これらの分野の研究などは早くから図書館(学)関係の雑誌などに発表



しておられたが、一九四二（昭和一七）年、『日本文庫史』（教育図書）を、一九四三（昭和一八）年には『日本蔵書印考』（文友堂）を、さらに一九四四（昭和一九）年『日本文庫史研究』上巻（大雅堂）というように戦前既にいくつかの著述が刊行されている。

戦後も一九四九（昭和二四）年の『図書目録法入門』（京都出版）を初めとして、一九五二（昭和二七）年『日本図書館史』（蘭書房）、一九五四（昭和二九）年『日本の蔵書印』（芸文社）など、多くの著作が出版されたのである。図書館（学）関係以外の著述、そのほか多方面にわたる多数の論文などもあり、その旺盛な著作意欲には感服のほかないものがある。

図書館（学）界、そのほかの活動なども盛んにされ、日本図書館学会（幹事）、日本図書館研究会（理事）、日本図書館協会（評議員、参与）、私立大学図書館協会（顧問）などで、重要な役割をはたされ図書館界に貢献された。

司書の養成については一九四一（昭和一六）年に同志社大学図書館学研究会を起し、戦後この会を母体として同志社大学図書館学

講習所を開設し司書養成を初められた。そしてこれが基礎となつて一九五一（昭和二六）年には「図書館学」が同志社夏期大学に、翌年には文学部に設置され、「図書館司書課程」へと発展したといえよう。勿論多くの関係者の理解と協力によるものではあるが、先生は当初から退職まで、これを担当され、退職後は仏教大学・京都外国語大学で司書養成に熱中されたのである。

図書館から社史史料編集所に移られて、同志社の記録・文書の整理と管理に熱心に当られ、その一方で『同志社九十年小史』の編集責任者として、短期間に完成に導かれ、ご自身でもご満足であったであらう。

本年五月一六日、八一歳の個人的な生涯を閉じられた先生のご冥福をお祈り申し上げます。